

情緒不安定性人格障害患者が社会生活上の問題をうまく乗り越えていくために支え続ける看護の視点

阿久根頌吾（応用看護学）

【キーワード】 情緒不安定性人格障害、社会生活上の問題、認識の働かせ方の特徴、看護の方向性、関わり方の特徴、看護の視点

本研究は、情緒不安定性人格障害の患者が社会生活上の問題をうまく乗り越えていくために支え続ける看護の視点を導き出すことを目的としている。患者自身が社会生活上の問題を解決できることを目指して、看護の方向性を定めながら支え続けた自己の看護過程8場面を研究対象とした。研究方法は、各場面から「どのような関わりであったか」その時の「関わりの特徴」を取り出し、共通性と相違性を比較検討して、看護の指針を明らかにした。さらに各場面後に描きなおした「対象の認識の働かせ方の特徴」と「看護の方向性」が、その後の関わりと対象の変化にどのように繋がったのかを検討し、看護の視点を明らかにした。

【看護の視点】

〈対象は社会生活上の問題を抱え、その問題を自責的に受け止める思考過程によって自己否定的となる。そして、その感情を自分では整えることができず、自傷行為によって解決を図ろうとする。しかし、落ち着いた状態の時には、自分がどのような状況にあって、感情が乱れていくのかを語る事ができる〉と捉え、看護師は、患者が生活しているその時々々の認識を整えながら、患者が落ち着いたときに患者自身が乱れていく思考過程を具体的に自己客観視できるよう語ることを促すと共に、周囲の人間に感情の表出ができるように援助していく。

【関わりを積み重ねていくときの看護の指針】

1. 対象が自己の状態や生活の様子を具体的に語る

ことが出来る時や看護師の言動に笑顔で応じる時を心が安定していると判断する

2. 心が安定していると判断できた時に、現在の生活や思いに関心を寄せ、将来の在り方を描いていくことができるように問いかける
3. 対象が他者と関わった状況を否定的に思い込んでいるときには、対象の立場に立ち、苦しい気持ちを代弁し、感情の表出ができるように促す
4. 対象が抜け出せない状況や他者の様子を、対象とは別の視点での捉え方もできると具体的な実例を伝える
5. 対象が他者の気持ちを察して関わっているが、自己否定的に捉えている時には、他者の気持ちを察することができる事が良い部分であると伝える
6. 対象が乱れた状態であるときは、その前の生活に関心を寄せ、乱れてしまった対象の思考過程を予測する
7. 自傷行為をせずに言葉で表現できた時に、感情の表出ができたことを評価し、成功体験であると思えるように伝える
8. 自傷行為で解決してしまう認識を変える為には、感情の表出が必要であると分かり、さらに周囲に支える人が複数いることを意識でき、自傷行為に至る前に感情の表出がし易いようにする
9. 対象が対人関係や感情の表出がうまくいかずに乱れてしまう心の動きを客観視できるように、その時々々の感情を具体的に語る事が出来るように働きかける
10. 対象の表情から見捨てられ不安を察知し、状態が良くなっても見捨てないことを伝える
11. 対象が看護師を気遣うことができ、自分で感情を整えられることを確認し、関わりを終える